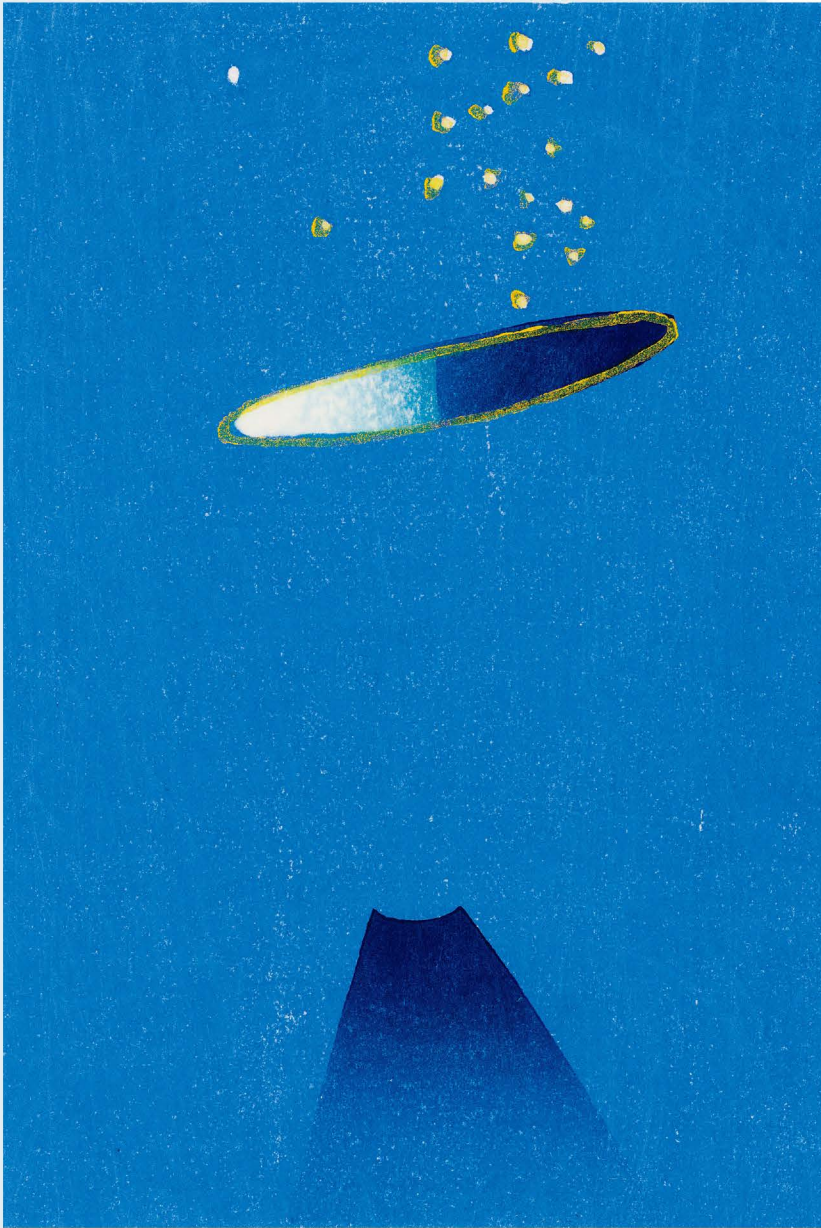




春陽帖

No.107

■チャリティー展示 ————— 2F 休憩室



会員有志による作品の展示、チャリティー販売を行います。
収益は社会福祉法人 NHK 厚生文化事業団、日本赤十字社を通じて、社会福祉事業、自然災害復興支援のために寄附します。

■春陽会研究会の紹介 ————— 2F 休憩室

春陽会では全国に研究会を設置し、絵画と版画の啓蒙及び研究活動を行っています。このコーナーではそれぞれの地方研究会をご紹介します。

■特別展示 ————— 3F 展示室

「広田雅久と春陽会」

広田雅久は、油彩画から春陽会版画部会員の勧めにより銅版画を始めました。当初は腐食によるアクアチント技法、後には広田の代名詞となるメゾチント技法によって詩情豊かな作品を多数制作しました。

漆黒の中に浮かび上がる静謐な情景は高く評価され、スウェーデンのノーベル賞顕彰財団から制作依頼を受けるなど、国内外で活躍した作家です。作品と共に完成に至るまでの記録や愛用の道具等を展示します。



18
SAT

入選者会場批評会（絵画部・版画部）

4月18日（土）13:00～15:00 参加無料 当日会場にて受け付けます。

授賞式・パーティー

4月18日（土）15:00～17:30

国立新美術館 3F 講堂 参加無料

Reception

Art Tour



春陽展アートツアー

4月25日（土）13:00～14:00 2F 会場入口集合
参加無料、ポストカードプレゼント

一般の方を対象にした、絵画・版画鑑賞ツアーです。
春陽会会員の解説を受けながらアートの新たな楽しみ方を発見していただけます。

25
SAT

春陽会について（春陽会小史）

春陽会は1922年（大正11年）、小杉末醒、足立源一郎、倉田白羊、長谷川昇、森田恒友、山本鼎、梅原龍三郎、さらに客員として石井鶴三、今関啓司、岸田劉生、木村莊八、中川一政、萬鉄五郎が参加して、院展洋画部と草土社が合流した団体として創立されました。

翌1923年（大正12年）に第1回展が開催され、その後、加山四郎、岡鹿之助、三雲祥之助、高田力蔵等フランス帰朝組に続いて、中谷泰、南大路一、また版画部には長谷川潔、駒井哲郎、清宮質文等、日本美術史に名を刻む多くの画家たちが参加しています。

本会は、戦時中は展覧会の一時中断を余儀なくされましたが、日本の風土と伝統に根ざした個性尊重の「各人主義」に基づく創設以来の理念を確実

に受け継ぎながら、藤井令太郎、田中岑、五味秀夫等、新しい才能や感性を受け入れてきました。

現在は絵画部約200名、版画部70名の会員を擁し、全会員による審査、運営により、新しい美術の可能性を模索するべく研鑽を重ねています。また、次世代育成のために、創立以来の伝統である研究会活動の拡充にも取り組み、更なる美術の発展と文化への貢献を目指しています。

春陽会発会当日（大正11年1月11日）



CONTENTS

prologue

- 2 理事長挨拶
 - 3 展覧会実行委員長
-

第102回春陽展レポート

- 4 審査・陳列・展示レポート
 - 6 講演「描くことと書くことと、について」
 - 9 特別展示「三井永一とリトグラフ」
 - 10 受賞の言葉
-

春陽会 2025

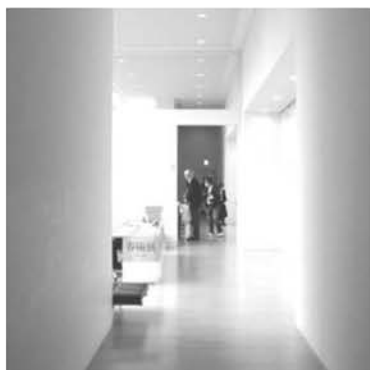
- 19 新会員紹介
 - 20 巡回展 名古屋展・大阪展 レポート
 - 23 展覧会 PICK UP !
 - 24 SNAW 2025 レポート
-

message

- 26 全国研究会から
-

information

- 32 アーカイブから



「春の日の夕暮」

春陽会 理事長 立堀 秀明



2007 年に国立新美術館へ会場を移してから、春陽会はまもなく二十年の節目を迎えます。この間美術界が大きく姿を変えた時期と重なります。インスタレーション、映像、デジタル技法、そして AI の進歩など、表現の領域は急速に拡張し、「作品とは何か」「美術の範囲はどこまでか」という問いが、日常的に投げかけられる時代となりました。

こうした流れは社会の変化を敏感に映し出すものであり、美術が果たす役割の大きさを改めて示しています。AI やデジタル技術は、作品の一部として自然に組み込まれるように感じられます。表現のスピードが加速し、コンセプトが先行するあまり、人の手で形を探り、対象と向き合うという創作の原点が見えにくくなっています。結果だけが評価され、過程の試行錯誤が軽視されているように思えます。技術は意思を運ぶ器であり、読み取る力が弱ければ誤読につながります。

その一方、今年も印象派や近代美術の大規模展が全国で多数開催されます。国際的な名品を軸にした動員型展覧会も健在です。

公募展に携わる者にとっては六本木駅の正面玄関よりも、搬入出口のある乃木坂駅から入館するほうが馴染み深いかもしれません。通りの向こうに見える青山霊園の桜を眺めながら、肌寒い中ベンチに並んで開館時間を待つ。上野の桜の記憶もありますが、春

はいつも搬入の季節で、気づけば二十年近く六本木の桜を眺め続けてきたことになります。大きな災害があり、人間の無力さと愚かさを痛感しました。コロナ禍では隔たりが生まれ、孤立が深まりました。この国でも、かの国でも、独裁や侵略を好む者が台頭し、社会は分断され、世界は大きく変わってしまいました。世の中はどんどん臭くなっている。それでもなお、絵を描き続けていられることに幸せを感じます。

春陽会が大切にしてきたのは、「手の思考」と「眼の誠実さ」です。対象を前にし、時間をかけて形を探り、絵具や版材と格闘しながら、実感に根ざした表現を紡ぎ出すこと。公募団体展は歴史が長い分、「伝統を守る場所」というイメージが強く、外からは保守的に見えるかもしれませんが、しかし実際には、団体展こそ多様であり、実験的な作家も多く存在します。

絵描きは「開かれた心で、柔らかく作り、執着せずに手放せ」と教えられた。執着してはならない、執着するのは愚かだとも。「伝統とは守ることではなく、日々更新し続けることだ」とも言われた。

先達の背中を追っているだけでは、前に進めない時があります。誠を尽くしても、人に誤解されることもある。しかし真実は、いつか必ず理解される。そんなことを思いながら、会場に並ぶ絵を眺めています。

中原中也の詩集に「春の日の夕暮」という詩があり、ふと心に浮かんだ。

第 103 回春陽展に向けて

「AIに聞いてみた」

展覧会実行委員長 大津 悟司



第 100 回展を大きな区切りとし、それから3年目を迎えました。春陽会の未来を見据え、見直すよい機会を得ました。第 103 回展には一人一人の思いが作品の形で集結したと思います。今回、展覧会に来ていただいた皆様には、作品のみならず作者や背景までじっくりと味わっていただきたいと思います。

さて、AI が進歩した今、勝手に作品までつくってくれる時代になったらしく、驚くとともに展覧会の一つの課題にさえています。AI は何でも答えてくれると聞き、試しに春陽会の理念である「各人主義」とは何か、AI に尋ねてみました。私のスマホでは残念ながら答えはなく、わざわざ「個人主義」と訂正されてしまいました。そこで、「春陽会」を付け加えると、素晴らしいことにちゃんと次の答えが返ってきました。

『春陽会の基本理念で、個性を尊重し特定の芸術主義に縛られず、自由に表現する方針を指します。』とあります。そして、『自由な表現の追求』『相互の尊重と協調』『多様なジャンルの許容』の3点に分類し、簡潔にまとめているのはさすがです。さらに、『創立の背景』『先駆的な理念』『現代への継承』と補足があり、若手作家の育成にも力を入れていると結んでいます。(注：『 』内は、検索結果の見出しそのまま)

AI は、最後に微妙なところをついてきました。現在の春陽会の課題に、会員の減少があります。昨年の春陽帖に吉田拓郎の「イメージの詩(うた)」を紹介し、これから春陽会を動かすのは若い人だと書きました。今後も会員の自然減を阻むことは不可能であり、春陽会の未来は若い会員に託さざるを得ません。AI が「若手作家も増加して活気溢れる会です。」と付け加えるよう、頑張っていかなければならないようです。





絵画部 審査・陳列・展示レポート

新たな2歩目となる第102回春陽展の会員作品は、A室の始まりを主に新しい会員や大作を中心に展示した。4室には春陽会を長い間牽引してきた作家の作品が並び、B室はA室同様に広い空間の連続する回廊形式で、鑑賞しやすい密度のある陳列になった。

絵画部での公募数は348名820点と前回展よりやや少ないもので、2点入選者以外は一段掛けで綺麗な展示となったのだが、私としては少し寂しさが残り元気が欲しいと感じた。

第100回展以後は特別展示をせずに、作品で魅せる展覧会にするとの方針なので、その点ではじっくり鑑賞できる素晴らしい春陽展なのだが、今後のことを考えるとそれで安堵してはいられないと考えている。

若い人が公募展に出品しなくなって久しいし、美大の先生も公募展の人が少なくなっていると聞く。それならば、公募展は何をめざしてきたのかという問いに行き着くであろう。自分の作品とは何か?に始まり、近代的自己の存立の有り方を探る根源的な問いを、美術を通じて互いに追求するその姿勢をこそ公募展は問題にしてきたと私は考えている。

春陽会創立から100年を経ているが、創立時に起きた関東大震災は江戸と明治の文化を全て烟と灰にした。春陽人はそこから「日本人の油絵」を深く考えることとなったと思うことがある。そしてその答えはまだ追求の途上であると考えている。

第102回春陽展 絵画部審査主任 佐藤 勤



版画部 審査・陳列・展示レポート

第 102 回春陽展版画部審査は4月5日に行われました。今年の出品人数は会友 77 人、一般 36 人、出品数は会友 183 点、一般 91 点でした。昨年と比較すると搬入点数、搬入者数は、ほぼ横ばいといえます。

毎年、全会員の審査出席を呼びかけ、今年出席した会員（途中の入退出を含めた）31～33 名で、慎重かつ公平に審査、授賞会議を行いました。各地域からの会員の真剣な意見の交換、討論を経て入選点数は 152 点となりました。今年は会友の作品に目立ったものが多く、結果として受賞につながりました。皆さんの長い研鑽と努力をうれしく思いました。

4 月 15 日の陳列日は各室ごとの責任者を中心に多くの会員が協力し合い、作品のサイズ感、モノクロ、カラーなどを考慮しつつ、各室どの作品にも光があたるよう配置に気を配り、展示作業を行いました。総展示作品数は、会員も含めて 253 点になりました。審査の緊張感から一転、清々しい会場に安堵しました。

また、今年の特別展示は、絵画部・版画部両方の会員として作家活動を続けられた三井永一氏を取り上げ、その長きにわたる多彩な画業を紹介いたしました。

第 100 回記念展後、「会場を作品中心の展示でみせる」率直なテーマのもとに第 101 回展、そして今年の第 102 回展へと続いています。作品中心という当たり前の言葉の持つ厳しさを考えずにはいられません。会期初日の会場に立ち、団体展は出品者個々の学びと努力の結集の場であるということを改めて心に命じました。

第 102 回春陽展 版画部審査主任 篠田 紀美代

第102回春陽展 講演会 「描くことと書くことと、について」

2025年4月20日(日) 開演 14:00 閉会 15:30

国立新美術館 3F 講堂

講師：山口 謠司氏(平成国際大学新学部設置準備室顧問)



山口 謠司氏

1963年 長崎県佐世保市に生まれる。
現在、平成国際大学新学部設置準備室学術顧問。板橋区教育委員、大東文化大学名誉教授。
中国山東大学客員教授。

博士(中国学)。

長崎県立佐世保北高等学校、大東文化大学文学部卒業後、同大学院、フランス国立高等研究院人文科学研究所大学院に学ぶ。ケンブリッジ大学東洋学部共同研究員などを経て、現職。

専門は、文献学、書誌学、日本語史など。

また、ラジオパーソナリティ、イラストレーター、書家としても活動。

著書に『妻はパリジェンヌ』(文藝春秋)、第29回和辻哲郎文化賞を受賞した『日本語を作った男 上田万年とその時代』(集英社インターナショナル)、『んー日本語最後の謎に挑む』(新潮新書)、『文豪のすごい語彙力』(新潮文庫)『これだけは知っておきたい日本の名作ーこの一冊が時代を変えた』(さくら舎)などがある。

prologue

何をどう描くか、どう書くか。
それは自由です。

しかし私たちは、本当に「自由」
に描く(書く)力を、どれほど手
にしているのでしょうか。

明治の文豪・夏目漱石は、印象派絵画からの影響、漢詩の世界との出会い、そして大患という決定的な経験を通して、漱石なりの「自由」を獲得しました。表現における自由とは何か。自由な境地とは、いかなるものなのか。

本講演では、明治以降の文学と絵画の関わりを手がかりに、描くことと書くことの本質について考えていきます。

講演記録は以下のYouTube動画よりご覧いただけます。

Lecture Record (YouTube)



第102回 春陽会 講演会「描くことと書くことと、について」
講師：山口 謠司氏(平成国際大学新学部設置準備室顧問)
JAM Japan art museum / 美術 芸術 現代アート 彫刻 立体 インスタレーション

https://youtu.be/_2C15dSFt_4?si=H67WMLKpUK2M-h7y

描くことと書くことと、について

平成国際大学 新学部設置準備室 顧問
山口 謠司

何をどう描くか、どう書くか。それは自由です。

でも、我々は本当に「自由」に、描く（書く）力を持つことがなかなかできません。

ものの考え方、ものの見方、そして筆の持ち方から紙やキャンパスの使い方、パソコンの使い方などに至るまで、習い、矯正されていくからです。

今年、2025 年は、明治維新から 157 年を迎える年になります。

今年、大阪では万博も開かれますが、印象派の画家たちに大きな影響を与えた 1867 年のパリ万博からも 158 年が経ちます。そして昭和 100 年です。

江戸時代の価値観から抜け出して、欧米で発達した近代科学と自由、独立の精神を学校教育で教えられるようになる明治以降、「近代」を学び、「近代」から「現代」へと欧米の文化を仰ぐ思考をしてきたのではないかと思います。でも、本当の「自由」な表現を得ることができたのでしょうか。

夏目漱石は、『門』の執筆途中、明治 43（1910）年 6 月胃潰瘍を患い、8 月 24 日の夜に大咯血をして危篤に陥ってしまいます。

この大患を境に、漱石の作風は一変してしまいます。

この頃のことを書いたのが、「思い出す事など」ですが、この随筆のなかで漱石は、「風流」という言葉を九回も使っています。たとえば、「当時の余は西洋の語にほとんど見当たらず風流と云う趣をのみ愛していた」と漱石は言って、次のような「句に現れるような一種の趣きだけをとくに愛していた」という。

秋風や 唐紅【からくれない】の 咽喉仏【のどぼとけ】

漱石にとっての「風流」は、何とも言えない寂寞のなかにぼんやりと浮かぶ冷たい光に似ています。

「余は黙ってこの空を見つめるのを日課のようにした。何事もない、また何物もないこの大空は、その静かな影を傾けてことごとく余の心に映じた。そうして余の心にも何事もなかった。透明な二つのものがぴたりと合った。合って自分に残るのは、縹渺とでも形容してよい気分であった」

漱石の魅力を伝えるのが、今回のお話の目的ではありません。漱石は、印象派の絵の影響と漢詩の世界の影響、そして大患に遭って、漱石なりの「自由」を獲得するのです。

はたして自由な表現とは何か、自由な境地とは何か。明治以降の文学と絵画の関わりについてお話をさせて頂ければと存じます。



講演会の後で思ったこと

第102回展覧会実行委員長 大津 悟司

4月20日の午後、山口謠司氏を講師に迎え、『描くことと書くことと、について』と題して講演会を行いました。山口氏は大学教授であり作家ですが、私にはラジオパーソナリティやイラストレーターの印象があります。論語の専門家と聞き、著書「世界一役に立つ図解論語の本」を持って初対面の挨拶をしました。そしてサインをいただきました。それを見て、これは絵画だと思いました。

大所高所から、表見や春陽について語っていたきたいとお願いしました。表現とは何か、そして春陽のこれからを考えるヒントになりました。ここでは講演内容ではなく、私の印象に残ったことなどを紹介させていただきます。

講演前に控室で入江観氏とお話をなさっていたようで、そこの話題、「自分なりの見方」、「独創性、独自性」から話が始まりました。自分なりのものの見方や表現は、日頃から考えていることです。山口氏の問いかけは、私の心に深く残りました。

「素」という言葉を紹介されました。「す」と読みます。自分の素、素の自分を分かっているかどうか、それがものの見方の第一関門です。「いろいろなフィルターに邪魔され、飾りをつけ、素を忘れてはいないか」「素のままの自分の見方で、素のままの自分を出すことができているか」それ以前に、素のままの自分で生きているかどうかさえ疑わしいです。

今の若者の多くは、自分が何をしたいか分かっていない。自分のやりたいこと、これからのことも分らないまま過ごし、就職活動に入ってやっと

何をしたいか考える人がいると聞きました。私は「木口木版画」を通して絵画表現をしています。「何をしたいか分かっているか?」「素の自分は何か?」「表現したいことはあのことか?」そして、山口氏が言う「種」を、きちんと大きく育ててきたらどうかと振り返りました。

山口氏は、公募展に関する話もなさいました。「会に入るということは、みんなと一緒に磨いていくということ」「個人だけだったり仲間がいなかったりすると、磨いていけない」山口氏は、「そもそも生きるということとは誰かと一緒に生きていくということであり、自分だけが良ければ良いという訳じゃない」と仰いました。だから春陽が、そして、仲間がいることが大事だと思いました。

孔子の話も興味深く聞きました。特に、素直でなければ「たまたま生きているだけ」になってしまうという話が印象的です。「素」のままの自分であり、「直」でありなさい。そして、心も行いもき

ちんとしていなさいという話も心に残っています。「直」は焦点を正面からまっすぐものを見る力であり、行動として表せるかどうかは、紙やキャンバスに表せるかどうかに通じると思います。「素直」は深いと思いました。

山口氏は言いました。セザンヌのサント・ヴィクトワール山が、かいた年や時間によって同じものがないように、富士山をかいても人によって、また同じ人でもかき続けることで違う山になる。それは、「自分を育てていくこと」でもある。私もそうでありたいと思いました。



(大津がいただいた山口氏のサイン)



3 階版画部会場風景

第102回春陽展 特別展示「三井永一とリトグラフ」

三井永一氏は18歳で春陽展初入選の後、1953年に絵画部、1964年には版画部の会員となり洋画家、版画家、挿絵画家、ガラス絵作家として活躍されました。1956年には南大路一事務所の書記も務められました。今回は版画部初出品から最終出品までのリトグラフを8点選び、版画下絵、文学作品の挿絵原画、木村莊八画の20歳の三井氏の肖像画、春陽会の物故会員の署名も多く残る個展の芳名帳と趣味の品々も資料として展示しました。三井氏の幅広い創作にかかる情熱をこの展示で皆様にお伝えできていたら幸いです。最後に貴重な作品と資料をお貸し下さり、親切なご助言を頂いた三井氏のご遺族に感謝いたします。

企画展示担当 篠田 紀美代／文



陳列ケースの展示

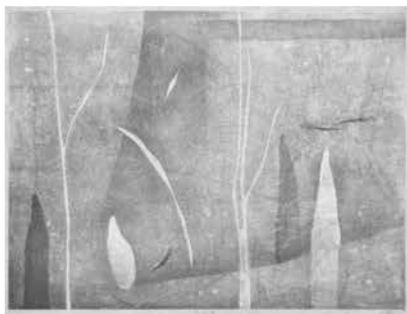


岡・中川・SOMPO 賞

岡鹿之助賞

版画部会員

川井 木綿 / KAWAI yu 『冬の音』 45.5×60.5 木版



20年間、憧れていた岡鹿之助賞を娘が20歳になる記念の年に受賞しました。

受賞式の席で涙が溢れてきて止まらなくなってしまったのは、娘と二人三脚で歩んできた年月と細々と続けてきた制作の時間が頭の中で走馬灯のように甦ってきたからだと思います。

うつむいたり、欠けたり、どこか完璧ではない形、それでいて愛おしい形を、これからも人生の四季を味わいながら描き続けていきたいです。



岡鹿之助賞 推薦理由

推薦委員 大久保 澄子

第102回春陽展岡賞は川井木綿さんの「冬の音」、受賞おめでとうございます。

この絵の中には勾玉のような石ころの形が点在し、うつむいたり、欠けたり、傷の入った石肌が人の生き方を表しているように見受けられます。20代の頃北海道の浜辺で拾った石ころが絵のモチーフで、川井さんの作品は一貫して柔らかな暖色系の色が使われ、木版のソフトな質感と相まって春夏秋冬の季節の流れ、光と影、希望をも感じさせる画面創りが心地よさとなっています。特筆すべきは作品の中に流れる造形への追求、シンブルに捉えた画面構成、ふんわりとした柔らかな質感です。

出品作の「冬の音」は冬に吹いてくる冷たい風、遠くに聞こえる鳥の声、乾いた木々のざわめき、雪、そんな冬の風景をイメージしながら版木を彫りましたと聞きました。

今年の作品はモチーフの石の形がより人間味を帯び、少し寒色系の色のレイヤーが加わることで、奥行きのある美しい画面構成となりました。硬質な素材をモチーフとしたことで柔らかなマチエールの絵肌に緊張感が生まれ、静かなる冬の音が聞こえてくる気配さえ感じます。

中川一政賞

絵画部会員

譚 剣華／TAN kenka 『風を待つ I』 S100 油彩



事務局から中川一政賞を頂いたという知らせを受けた時は、自分は日本語があまり得意ではないので、「聞き間違いではないか」と思いました。しかしその後、光栄の念がじわじわと湧きました。同時に感謝の気持ちがいっぱいでした。

今後の創作については、現在のスタイルにとらわれることなく、日々努力を積み重ね、より良い作品を描けるように精進していきたいと思っています。



中川一政賞 推薦理由

推薦委員 入江 観

私は長い間、譚さんの仕事に注目して来た。本人に直接確かめたことは無いが、出品初期には、フランスで長く活躍した木村忠太さんの影響が明らかであったように思われる。

近年、忠太からの影響を土台としながら、譚さん独自のものが鮮明になり、特に今年の作品は譚さんの世界が歴然と確立されたように見えた。

だからと言って、そこには何か声高な主張があるわけではない。あくまでも静かに、控えめに自然と向かい合い、自然のリズムに従いながら、ひたすら青緑色の微妙な美しさを導き出していく喜びが溢れている。

こうした、自分に正直に、地道に自分の世界を求め続ける画家が春陽会に居ることを、私は誇らしく思う。

SOMPO 賞

絵画部会員

諸星 浩子／MOROHOSHI hiroko 『祝福を』 S100 テンペラ



パリ 14 区の地下にカタコンベがある。室温は平均 14℃。コース全長は 1.4km 程度。1 回目の訪問の感想は、無数の頭蓋骨に恐怖だけだった。そしてこないだの 3 回目。。。とても楽しい。頭蓋骨の方々が頭を寄せ合い歌を歌っているよう。歌はもちろん La Marseillaise。頭蓋骨と大腿骨だらけで、これは誰の足とかは問題ないみたい。明るい。最高。地上に戻ると晴天。スケッチしつつ隣の駅まで知らない街を歩いた。



SOMPO 美術館賞 推薦理由

推薦委員 三浦 明範

諸星さんは、これまで昆虫の羽や抜け殻、干からびた動植物などを線的要素が主体の表現で描いてきた。その軽妙な表現はモチーフ自体が持つ儚いイメージとリンクし、現代社会における存在の儚さや曖昧さを表象していたと思われる。本年の作品では積極的に絵具を塗り重ね、対象の物質的存在を描いているようにも見える。しかし、奥行き表現には不利な描画材を使い、切り花はシルエットのように描かれている。そのため、むしろ対象の物質化を頑なに拒んでいるようにも感じられ、これまで以上に存在に対する懐疑姿勢が強調された。換言すれば、西洋絵画が重視してきた存在の表現に対する挑戦とも受け取れ、今後の展開を期待させることが推薦理由である。

春陽会賞



岩壁のマチュールV F130 アクリル



植村 友哉（絵画会友）「自己研鑽」

寄せては返す記憶の層、崩れゆく断片。その不確かさや揺らぎを受けとめ、岩壁の風化と堆積の気配に耳を澄ます。時間が刻んだ余韻を、私の輪郭として画面に留める。滲み出る感情を描線に託し、次の一枚へ。反復の中で層を重ね、画業の中で己を磨き続けたい。



rusty III F100 油彩



大塚 弘（絵画会友）「意識下のテーマ」

落ちツバキの花びらが日ごとに色を変えてゆく。ある日、錆びたトタンの色と区別がつかなくなった。面白いと思った。これはメント・モリの絵なのかと知人は訊くが、そのつもりはなかった。

しかし毎朝鏡に映るのは、うら枯れたワラビの様な自分の姿。老いたるは老いたるものの連想を持つのかもしれない。



白のアピール S100 油彩



谷本 優子（絵画会友）

始まりは、たいてい自然や風景。いろいろな所に隠れている暖かいもの。穏やかな空気にある強い力。日常の中で見つけた小さなドキドキを表現していきたい。色・線・面で。

受賞作品は、国立新美術館入口のつつじの白の印象が強烈で、その白から生まれた作品です。その作品が国立新美術館に展示され、春陽会賞を受賞しとても嬉しく思います。

光の組成 25-01 90×60
銅版・エッチング・アクアチント

山本 かつ江（版画会友）「"今"を楽しむ。」

コツコツと進めている銅版画づくりは、エッチングの線とアクアチントの面で構成されています。黒と白のコントラストやグラデーションの配置に悩みながら、思うようには仕上がってませんが、何回も挑戦しています。

そんな中、最近は銅版画を制作できる「今」を感謝と共に、楽しんでいます。



週末の地図Ⅲ S100 油彩



私のスペース 3 F100 油彩



響 F120 油彩



刻の移ろいⅡ F100
ミクストメディア・油彩・アルキド絵具



Rainy III F120 アクリル

浅川 正章（絵画会友）「全てに感謝」

盛夏、2ヶ月の間に従兄弟が亡くなった。まだ2人は若かった。人生は自分の思うようには行かないし、何時生命が絶えても悔いが残るに違いない。結果では無くプロセス。自分に正直に毎日を過ごすことと絵を描けることに感謝したい。

浅野 とく代（絵画会友）「これからも・・・」

私の作品は、長年描きつづけているモチーフである椅子と机の様子です。空間を意識しながら何かを見つけないかと思っています。今もこだわりから抜け出せないでいます。グレーの色彩の中で試行錯誤しながら、椅子と机が寄り添って語りかけてくれたらいいなどの気持ちです。

これからも受賞に感謝し、初心を忘れずに描いていきたいと思っています。

稲垣 朋子（絵画会友）「目地と葉っぱ」

歩道に映る木漏れ日をテーマに描いて3年あまり。画面にはわずかな植栽とコンクリートの目地も登場する。大樹がもたらす陰影や、変化し続けているものの面白さに惹かれて描いているはずなのに、最近画面を横切る目地の方向や、植栽の分量ばかりに気を取られていることに気づいた。「目地かあ・・・」一日に何度も頭をもたげる。

試行錯誤の結果は、良くも悪くも次の春陽展で。

太田 利徳（絵画会友）

人の儚さをテーマに、現在は雑草や蔓が覆いかぶさった壊れかけた家をモチーフとしています。今年も新たなモチーフを探す為に出かけたのですが、驚くほど多くのその様な廃屋が簡単に沢山見つかり、驚かされました。時の流れを感じざるを得ませんでした。其処に暮らした人々は存じませんが、その息遣いの欠片を少しでも表せないかと思っています。

加藤 順子（絵画会友）「Rainy」

早朝傘を持って散歩に出る。人気のない雨音の中、ひんやりした空気に包まれて、樹木や建物は霞んで幻想的、足元にはしっとり濡れたアスファルト、土、草、小石。

そして私は、水溜りがあると立ち止まって魅入ってしまう。水面に映る雲やその間から顔出す太陽、電柱、電線までも美しい。

雨の中の散歩で、私の心は浄化され、普段隠れている感性が磨かれる。



水の果てI F120 アクリル

川端 陽子（絵画会友）

私は「水」をモチーフに描いています。制作に当たっては、目新しさを意識せず、あくまで「私の世界観」を出したいと願ってきました。それは簡単でないのですが、最近、空間の中に大地と言う実像と水の映り込みと言う虚像が、同等に合わさった世界を表現したいのだと明確になってきています。それをきちんと伝えられるよう、さらに挑戦し、創作を楽しみたいです。



いきもの日記 2025-1
S100 ミクストメディア

佐々木 芳子（絵画会友）「いきもの日記」

近くに花鳥園があり、早朝にスケッチを楽しむ。久々に訪れるとヨタカの源ちゃんかいて、腕に乗せてもらった。大きな瞳と見つめ合い、幼少から高校まで鳥を飼った日々を思い出す。命の営みを感じた生き物との時間が蘇り、その思いをと、「いきもの日記」に描きつづっている。



Shine Muscat S100
油彩・アクリル

玉上 順子（絵画会友）

私は光と色に関わる自然現象をテーマに制作しています。描くときに重要なのは、はじめに覚えた感動を作品の中に存在させることです。今回出品したマスカットでは、黄緑色の果皮の透明感、水滴の光の反射、周囲の景色が果皮表面に映り込む様子に感動しました。これからも、こうした自然が創り出す繊細な美しさを表現していきたいと思っています。



あめのおと一律ー
F100 油彩

丹下 千春（絵画一般）

激しい雨の音に遮られ、周囲の雑音が消えたとき、私は私が何にも属さない「個」であることを意識しました。それは孤独であるとともに、解放でもあったと感じたのです。その瞬間の雨の音と、得られた気づきを可視化しようと制作に向かいました。拙くはありますが、少しでも表現できていればと思います。



梢 No.12 F100 アクリル

土橋 康江（絵画一般）

メタセコイアをシリーズで描いています。そのずっと伸びた立ち姿を大切に表現しています。同じ対象でありながら、繰り返し向き合うたびに新たな視点が生まれ、いまだ完成には至っておりません。会員の皆様からのご指導を通じて、多くの学びと気づきを頂いております。これからも、試行錯誤を重ねながら描いていきたいと思っています。



Life F120
ミクストメディア

中島 久（絵画会友）「見知らぬ場所」

私は「見知らぬ場所に佇む人物」をモチーフに制作しています。そこに描かれるのは、私自身の内面にある孤独や静寂です。自然の中でひとり立つ人物は、現実の風景でありながら、同時に心の中の風景でもあります。

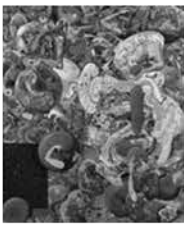
鑑賞者がその姿を通して、私という人間の存在を、そして自分自身の静けさにも触れてもらえたらと思います。



煌くI F100 油彩

野村 亜矢子（絵画会友）

3年ぶりにいただく賞、身に余る光栄です。様々なモチーフを模索する中で道に迷いましたが、結局はまた、「階段から見下ろす風景」というモチーフに戻ってきました。さまよった末に再び向き合ったこのモチーフに、今の私だからこそ見つけられた光と影がありました。この受賞を糧に、これからも制作に励んでいきます。



喃語でI 187×159
アクリル

船本 英明（絵画会友）

「喃語」とは、幼児期の意味をもたない音声を指す。当初、たどたどしく語りきれない幼児の鬱々とした思いのような表現を模索し、このシリーズで描き始めた。次第に幼児期の湧き出る言葉がもつ生命感に似た表現へと変化し始めている。今、とにかく描いている行為と実感を大切に、未熟な「喃語」で足し算と掛け算を重ねて、重ねていきたい!!



心の音（I） F130
ミクストメディア

星 啓子（絵画会友）

2004 年から出品し続けており、振り返ると4回変化している。ある時に心がうごめきだし、試行錯誤を繰り返す。今までは、人を重ねて描きイメージを拡げ、新しい形が生まれることにより、人々が響きあって、多様性が生まれることを表現してきた。今回は、その響き合っている人々の一人として、己の心の音を聞き、手を動かしてみた。



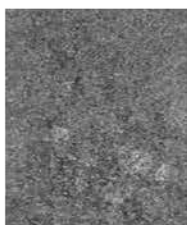
希望I F120 アクリル

水野 尚枝（絵画会友）「前進」

ゴッホの人生と作品をたどる展覧会を鑑賞しました。感動しました。

ゴッホは自分でも、天賦の才はないと考えていたそうです。それでも真面目に取り組めば、価値ある作品をきつと描けると信じていた。「何か真剣なもの、何か新しいもの、魂のあるものをつくりたい。前進だ。前進だ」1883 年の書簡にそんな言葉がありました。

楽しく、前進だ！



Page-148 F130
アクリル



翔 100×74
板紙凸凹版



life-1 82×57
平版



Potager 1 114×93
木版・コラグラフ



MISHIMA Sta-II 源兵衛川
60×82 木版

山下 淳（絵画会友）「拙い私の絵」

ちょっと先人の絵を見ただけで、自分の絵の拙さが露見してしまう。これまで、何を描いて来たのかと思ってしまう。しかし、描いている最中は、楽しくて仕方がない。これがいけないのか。一筆一筆、自問自答しながら描くべきなのかも知れない。頭は楽しさで一杯になり、血がのぼり、前後左右が分からなくなる。先人は何を思い描いたのか。今も自分に問う。

飯田 恭央（版画会友）「羽ばたく」

作品の殆どが生き物なのは、私には身近な存在だからでしょう。野鳥の鳴き声は十数種類聞き分けられるが、見ている積りが鳥から私が見られているのかも……。鼻は羽ばたき音も立てず、耳の位置のズレに因り獲物迄の距離を測れます。又鳥には珍しく正面向きの目です。

板紙凹凸版に出会えた事は大いなる幸いでした。この技法は私に最も合っていると感じています。板紙凹凸版は表現の幅も広く、まだまだ多くの可能性を秘めた技法なのです。

石川 順子（版画会友）「Life」

戻ってきた「ひと」の日常をリトグラフで表現した。普段見過ごしてしまっていた何気ない情景に、ふと足を止めて魅入ってしまうようになった。人々の営みがこんなに温かく愛おしいものなのかを感じている。モチーフは、ひとりの「ひと」としての自分のアトリエから始まり、万人が使うであろう愛着のある「物」たちだ。今は彼らと語り、描き続けたい。

片岡 啓子（版画会友）「彫刻刀で絵を描く」

Potager 1のモデルは妹が栽培したサツマイモです。芋ほりをして生命力あるサツマイモとその根に感動して、早速デッサンして作品にしました。

鉛筆の線は弱々しい線では描けませんが、彫刻刀で描く線は力強く生き生きとします。彫ることは木版画で一番楽しい時間です。彫刻刀で絵を描くように彫り、これからも楽しんで作品づくりしていきたいと思います。

木村 敏明（版画会友）

いつの間にかステーションシリーズを続けて20年以上が過ぎた。悩み、もがきしているうちに、段々と高みに向かって居るつもりがゴテゴテの沼にはまっていた。思い切って気を抜いてサラリと版に向かったら、違った世界が見えてきた。

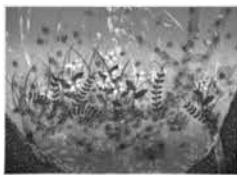
先達の教え「力を入れ過ぎると作品は活力を失う」



彼方の地平IX 60×80
銅版

小山 恵美子 (版画会友)

美しい黒に憧れて始めた銅版画。線を彫り、線にインクを刷り込み、拭き取る…、経験を重ねてもなかなか憧れの黒にはならず、道具を変えてみたり、腐食方法を変えてみたり。アクアチントを重ねた結果、禿げてしまったようになり、泣きたくなったことも。しっとりとした美しい黒に近づける日はいつ…? いつか憧れの黒を作品の中で実現したいと思っている。



connection, 時I 51×71
平版

佐藤 千恵子 (版画会友)

「春になったら春陽展」という時間軸の中で私の人生は進んでいます。

アートは持続力が最低条件ですが、そのモチベーションを保つには春陽会の皆様のアドバイス、励まし、そして時には耳の痛い指摘も有り難いものです。

今後も自然が織り成す美しい色、可憐でユニークな形、そして人を開放に導く画面構成を目指して作品を創りたいと思います。

会友賞



私の耕作地I F120 油彩

相羽 あつ子 (絵画) 「大地より力を得て」

日々携わっている耕作地を絵画表現したいと描き始めたものの、思う表現が出来ず、時には耕運機で畑を駆けずり回り気分転換。耕作地に肥料が重要な様に、今回の賞が私にとって大切な肥料となりました。一步一步前進! 今後も描き続けたいと思っています。

ご指導下さった先生、又、画友の皆様にお礼申し上げます。



埠頭I F100 油彩

大木 利子 (絵画) 「クレーン」

様々なクレーンはあるけれど、この黒い鉄骨の塊はいまだ表現しきれない。かなり古く重々しい魅力がある。形の面白さも気に入っている。画面の中にどう切り取るか、マチエールは! 色彩は! 毎日格闘しています。

どうぞご指導の程よろしくお願い致します。



縄文人が通った道 (初夏)
F120 油彩

高橋 洋一 (絵画) 「ジンスに抗う」

今回大変な賞を頂いてしまいました。と言うのは、神奈川研究会に限れば、過去に会友賞を受賞された方はその後すぐ引退されているからです。さらに神奈川研究会では事務所庶務を熱心に務めた会友の方は皆退会しているのです。2つのジンスを背負い、大いに意識しつつも、あまのじゃくの精神と地道な努力で抗っていきたいと思います。

会友賞



追想II F100 油彩

豊嶋 章子（絵画）

高校の美術部入部は優に半世紀以上前、春陽展初入選からも40年近くになるうとしています。その間、黙って見守り続けていてくれた母が昨年静かに旅立ちました。その母の思い出の品々を描いた作品で会友賞受賞。

「喜んで?」、空を見上げながら国立新美術館への道を急ぎました。忘れられない1年となりました。

無題 2025-① F130
アクリル

中山 悦男（絵画）

今回の作品は、外界と内面のせめぎ合いからできました。迷いながらも描き続ける中でイメージを造形する手応えを感じ、次のステップに進む一点になりました。

Caught in a landslide
103.5x73.5
プレスコジクレーデジタルプリント

鈴木 朝潮（版画）

デジタル版画は、PCで製作する電子情報を版画の版と考え製作する芸術。従来の版画では出来ない表現と、美しい色彩が特徴です。PCで数値化された色彩データを合わせます。物理的に絵具を合わせて色を作っているのではないので、彩度が落ちたり濁ったりする事はありません。新しい時代の版画と言えるでしょう。

Underwater Annealed 12
87x60 コラグラフ

辻 義弘（版画）

頭の中にイメージできているものを作品にするわけですが、全くと言っていいほど思うようにならないことばかり。ですから、あれこれいろいろなことを試み、あがいています。無駄にしたインクや紙、時間はどれほどでしょう。でもね、「いろいろ考えて体を動かしていることがボケ防止、健康につながっているんだよ」と聞き直る毎日です。



駆けめぐる 52.6x68 木版

徳永 庸夫（版画）

34年前、子供が中学生になり手離れたのを契機に、妻の勧めで伊東繁特先生の本版画教室に入り、ご指導の下、春陽展に出品してきました。絵を学んだ経験は無かったのですが、抽象画の色の変幻の魅力に気付き、途中から抽象版画を制作。頭の中に湧いて来る喜びや、ワクワクするイメージと色の作品の制作を心がけて来ました。

春陽会 2025

新会員紹介

new member

第102回展 会員推挙



絵画部 太田 利徳



刻の移ろいII

春陽会に初出品以来自らの作品のみが関心事でしたが、この度会員推挙を頂いたことで初めて春陽会の運営や研究会メンバーについても考えていかなければならない立場になったと気づき、身が引き締まる思いが致します。

これまで築かれた春陽会の輝かしい歴史を今後も継続し、積上げていくことに参加し、一端を担わせて頂ける事を誇りに思います。



絵画部 遠山 水明



ハムレットの母

『会員推挙をお受けして』

2025年4月に会員になりました。

初めて総会に出席しました。見るもの聞くもの初めてで、好奇心も刺激されると同時にこの初心を忘れないよう、大切にしていこうと思いました。



絵画部 浅川 正章



週末の地図III

『素晴らしい縁をいただきました』

身が引き締まる思いです。乱雑な自分にとって「絵は描くものでなく、何者かに描かされている」ことにやっと気がつきました。その何者かはわからず、全てをお任せする次第です。

これからも迷いながらも、自分を信じ一步一步進んでいきたい所存です。



絵画部 玉上 順子



Shine Muscat

はじめての入選は2016年のことでした。出品当初は自分がどんな絵を描いていくべきか迷いながらのスタートでしたが、毎年春陽展に挑戦することが創作の大きな原動力となり、今日まで続けることができました。

これからもいただいたご恩に少しでも報いることができるよう、日々研鑽を重ね、創作の時間そのものを楽しみながら作品づくりに励んでまいります。



版画部 山崎 英子



彼方のヒカリ'25

リトグラフとの出会いは本当に偶然でした。市民大学の女子美術大学での講座で基礎を学び、そこから制作技術や方法などを試行錯誤して15年以上が経ちました。

最近は誰もが感じる低迷期に入り、制作意欲も薄れつつある時にもう一度、真摯に向き合いなさいと言うサインを今回頂いたのかと思いました。続けようと思います。

102nd exhibition report 巡回展 名古屋展



第102回春陽展 名古屋展

2025年5月13日～18日

愛知県美術館ギャラリー

(愛知県芸術文化センター 8階)

共催：中日新聞社 東海テレビ放送 東海ラジオ放送



第102回春陽展名古屋展は2025年5月13日（火）から5月18日（日）まで、愛知県美術館ギャラリーにて開催されました。

今年は愛知県美術館で国際芸術祭が長期間開催される関係で、各団体とも展示面積を25%縮小しての開催となりました。展示への影響が懸念されましたが、可動壁の追加や陳列を工夫することで、全国の会員・受賞作品に中部支部会友・一般作品を加えた計289点を展示することができました。

初日には共催の中日新聞社、東海テレビ放送各社が取材に訪れ、新聞紙面、テレビ放映やWeb配信で開催をPRいただきました。会期中のイベントとして、初日にアートツアーを開催し、講師の山本秀樹氏、飯田耀子氏により、伝統から現在に至る表現や技法について講話があり、約40名の聴衆が聞き入りました。

また、17日には会場批評会、画談会、懇親会が開催されました。批評会には講師として中部支部会員のほか、本部、関西支部から立堀秀明氏、狩野三也子氏、ウチダヨシエ氏、山口剛史氏、ブレンドレヨーク氏、入手朝子氏が参加され、出品者一同、熱心な講評に聞き入っていました。

画談会では中部支部会員によるパネルディスカッション「中部次世代の想い～伝統から未来に向けて～」が行われ、100回展を終えた軌跡とこれからの春陽会中部支部の在り方について熱心な議論が交わされました。

懇親会では共催各社、全国の会員を来賓に迎え盛大に開催され、絵画談義に花が咲きました。

関係者の皆様のご協力のもと4,403名の入場者を数え、盛況のうちに6日間の会期を終えることができました。ありがとうございました。

春陽会中部支部事務所 長谷川光一



特別企画 画談会

パネルディスカッション

「中部次世代の想い～伝統から未来に向けて～」

日 時：2025年5月17日（土）

会 場：東京第一ホテル錦

パネラー：東 直樹 大津 悟司 長田 文実香
倉地 小百合 鈴木 善晴 長谷川 光一

進 行：杉浦 尚史



例年名古屋展において特別企画とした画壇会を本年は、次世代につなぎ春陽会中部のさらなる充実・発展を図る機会とするためパネルディスカッションとして実施した。

1 はじめに 中部春陽会の歴史

初めに春陽会の理念「各人主義」について共通理解をしたうえで、中部春陽の活動の検証としてその成り立ちが説明された。「70年史」を基に1945年に水谷清による美術研究会が作られてから1947年名古屋支部設立。1949年中部春陽会結成。1957年中部春陽展（年展）開催。そして1960年中部事務所発足までの経過が紹介された。

2 中部春陽の活動（支部・年展・研究会）について

中部の独自性として支部、年展、研究会が1枚岩で連携している。具体的には次の通りである。

- ・年展は同人組織であり、話し合いで決定する民主的で自由な会である。以前は公開審査が行われ選外となる怖れがあったが、今は推薦制で応募しやすい。出品者へのお便りや声掛け等に努め裾野を広げている。
- ・研究会は、第一に研修の場となることを念頭にし、実技研修、スケッチ会他で描法、造形性など学ぶ機会を設けている。参加経験者からは、年展、研究会の場で多くの指導を受け創作を続ける意欲となったことが報告された。その中で今かかえている問題として以下の点が挙げられた。

3 現状の問題点

① デジタル作品の判断・評価について

本年度の審査であったデジタルプリントの出品について、版画は入選、絵画においては話し合いを経て選外となった。

この件について、デジタル作品は反対である。絵画制作は手作り、制作者の汗と涙がある。実直に自分の制作で見せていくべきである。今後判断材料も

多くなり、会として指針が提示され则认为するなど意見が述べられた。

② 出品者減少について

初めに絵画指導者の現場からの報告があった。高校生を指導しているが実情をみるとタブレット、スマホを使用しながら精神性を求めている。実際は小品で大作は描けない。大学でも大作3～4点を描けない学生が多い。年展は出品しやすいが、本展では評価されない。小品、中品、大作別に評価があるとよいか。

かつては作家として生徒を指導する中で出品者が広がってきたが、人と人がつながって生徒が増える関係性が少なくなった。定例批評会の作品数の減少。作品を持ち寄っての意見交換が難しくなった。（写真での批評は構図に限られ色彩は異なる）

4 有効性と手がかかり

中部は定例批評会に加えて展示形式作品批評会、年展があり作品を一堂に会し個別に批評が聞ける学びの場となっている。年展は、作品制作の個々人の思いをフラットに交換できる場であるので、次の出品意欲につながる。絵を始める人のきっかけとなるものが研究会にあるとよい。かつては、研究会で手ほどきして新しい人を送りこんだ。裸婦デッサンなどの場から出品につながった。また、個展、グループ展などの発表も刺激となる。高校生は仲間で共有して満足する傾向にあるので、SNSで発信するのも有効である。

5 まとめ

出品者の減少は今が正念場で次の世代が出てくるのではと期待する。まず現状維持に努力して運営を進める。かつて宮脇晴、加藤助八先生と出会い、規模の大きさに憧れをもった。その思いを失うことなく変わらずしっかり作業を続けると最後に支部事務所からの力強い発言で締めくくられた。

文 中部支部事務所 長谷川光一

102nd exhibition report 巡回展 大阪展

第102回春陽展 大阪展

2025年6月3日～8日

大阪市立美術館天王寺ギャラリー

後援：大阪市・大阪市教育委員会



第102回春陽展大阪展は令和7年6月3日から8日までの期間、大阪市立美術館天王寺ギャラリーにて開催されました。

大阪展は第96回展で開催されて以降、コロナ禍により97回・98回展が中止となり、その後の3年間（第99回から101回）は大阪市立美術館の改修工事のため、宝塚市立文化芸術センターを会場としておりました。今年は6年ぶりに大阪市立美術館に戻り、記念すべき開催となりました。

折しも4月から大阪・関西万博が始まり、街中に活気が満ちる中、美術館本館では「国宝展」も開催され、連日入場待ちの列ができるほどの賑わいを見せていました。その影響で人の導線が制限され、春陽展への来場者が期待より伸びなかった点は、惜しまれるところです。

今回の作品合計は193点。内訳は絵画127点、版画66点を展示しました。

受賞者は春陽会賞1名（絵画）奨励賞1名（絵画）会友賞2名（絵画・版画）でした。

会場研究会では絵画部より田中由子氏、版画部 立堀秀明理事長、三浦やほ子氏、中部支部より絵画部の長谷川光一氏、ゆみこむらせ氏、版画部 船戸郁子氏が講師としてお越しくださり、今後の創作活動の糧となる貴重なご指導を頂くことができました。その後の懇親会では、来賓のホルベイン(株)の吉村様、川端商会の茂越様そして講師の皆様を交え、ミyakミyak色のネオン輝く通天閣を望みながら中華料理に舌鼓を打ち、和やかな交流のひとつきを過ごしました。

今回リニューアルした美術館で再び大阪展を開催できたことは、私たちにとって新たな一歩となりました。この展覧会がこれからも、次の時代へと穏やかに受け継がれていくことを願っています。大阪展開催にご協力、ご来場いただいた皆様にご心より感謝申し上げます。

春陽会関西支部事務所 金澤 千鶴



春陽会版画部秋季展 2025 によせて

令和7年9月、文房堂ギャラリー（東京・神保町）において、版画部秋季展を開催致しました。

今年は会員49名、会友8名、一般1名による参加です。

前回に続き第102回展の審査にて全会員総意の下、賞候補となった会友・一般9名の作品を見て頂きたく、また批評会・懇親会を実施しました。

本展とはまた違った趣の作品を出品してくださり、幅広い視野と表現を求めて切磋琢磨している様子が伺えました。批評会では一人一人に丁寧な対話で学べる機会になりました。

彼らは今後更なる制作への意欲と、飛躍を期待させて下さると信じております。

会員の先生方は丹念な技術と深い表現を益々追求されており、後に続く皆さんにとっても大変学びのある機会となりました。

たゆまぬ努力の先に新しくも奥深い世界があると信じていきたい展覧会になったと思います。

秋季展主任 全田 紗和子

第42回 中部春陽2025 年展

「中部春陽2025年展」を終えて

例年、「年展」は名古屋の秋が深まったところに開催するのですが、今年に限って美術館の都合により、夏まっただ中の8月上旬に開くことになりました。展覧会が始まってみれば入場者も多く賑やかで、また冷房の効いた快適な展示会場でした。

展示作品は春陽会会員のみ20号とし、それ以外は従来どおりの130号が上限です。この展示は初めてのことであり陳列するまで心配でしたが、意外とよい会場効果となり安堵しました。

会期中の行事として「対話研究会」、「対話空間」、「会場画談会」などを行いましたが、なかでも会場画談会では「これからの中部における春陽会・・・」のテーマのもとに白熱した議論が交わされ、皆さんの会への愛着と意識の高さを感じました。

中部春陽年展事務所 杉藤 哲正



SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 2025



東京都美術館 ロビー階 第1展示室
2025年12月4日(木)～11日(木)

SHUNYO NEW ARTISTS WAVE

担当理事 高松 博仁

今年のSNAWは、東京都美術館ロビー階第1展示室において12月4日(木)～11日(木)の開催でした。今回は第102回春陽展受賞作家展(絵画部・版画部)と春陽会東京研究会展(絵画部)と2部構成の展覧会です。日時場所において去年のほぼ同様の条件で開催できたのは幸いなことでした。

初日を迎えるまでの、東京都美術館との折衝、事務所との連携、各部の主任との打ち合わせなど多岐にわたる綿密な作業と日程調整を担った理事長をはじめ事務所の皆様、担当理事の篠田氏、中台氏、東京研究会主任の佐藤氏に感謝申し上げます。また、今回から南大路美智子氏遺贈金の支出金対象事業となり、以前に増して細やかな運営がなされました。

展覧会場の案内パネルに「今後の活躍が大いに期待される作家たちに焦点をあて、春陽会の新しい波の到来を予感させる展覧会・・・」とあり、

手前味噌ではありますが、まさにその通りの充実した展覧会になったと自負しております。出品者36名点数70点。東京研究会展は42名42点、来場者は全日程合計で1,571名でした。

会期中、東京都美術館がゴッホ展を開催しており、館内のロビーに多数のお客様が集まっていたこともあり、春陽会をご存知ない方々のご来場も多数いただきました。校外学習の生徒さんや外国からのご来場者などが目立ち、春陽会を知り興味を持たれた方も多いと聞いております。白杖をついた方が介助の方と見えられ、絵の説明を熱心にお聴きになりながらご鑑賞いただいているお姿が大変印象的でした。

会場講評会も、大変熱心な参加者と講師の皆様のご尽力を持って初期の目的を達成いたしました。大変好評でした。紙上を借りて、感謝申し上げます。



第1部

第102回春陽展 受賞作家展

SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 2025



第2部

春陽会 東京研究会展 (絵画部)



全国研究会からの

声 & Message

各研究会では、様々な活動
が意欲的に行われています。

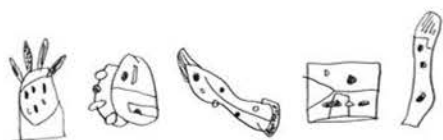
- 年間を通じた作品批評会
- 研修会ワークショップ
- 研究会展・会場批評会
- 講演会
- 全国研究会による選抜展

北海道研究会 絵画部

11月下旬に「第35回道作家展」
を開催しました。昨年よりも出品
者、来場者ともに増加し、盛況の
うち終わることができました。会場
研究会では絵画部会員の鈴木善晴

氏を講師に迎え、今後の創作について多くのアドバイスを
いただくことができました。少人数の研究会ですが、
作品の質と創作意欲を高めることが大切と改めて感じ
ています。

〔主任 奥山 哲三〕



カット／立堀 秀明

北海道研究会 版画部

今年の北海道研究会は、深川市
のアートホール東洲館で作品展を
行いました。広い会場でメンバー
の力作が並び、来場者からも好評
でした。研究会メンバーも来場して
くれて良い展示になりました。札幌をはじめ広い北海道
の何処で展示をするかが悩みの種であり、また楽しみ
でもあります。今後も無理のない範囲で頑張っていきたい
と思います。

〔主任 澁谷 美求〕



神奈川研究会

「72回 神奈川研究会展を終えて」

心配した猛暑もどうか和らぎ、
10月1日～10月6日 横浜市民ギャ
ラリーでの研究会展を無事に終えま
した。

遠路、伊藤昭二先生をお迎えして研究生との真摯な講
評会となりました。

縮小していく支部ですが、確かな若い芽吹きもある神奈
川支部です。会場も会員数もまだ恵まれていることを自覚
して次へと繋げてまいります。

〔主任 桜井 敬子〕



東京研究会 版画部

「意外と知らない事」

今年は研究会展を開催する年、今回は一般出品も含め多数の参加者による展示となり、小品ながら見応えのある会場となりました。会期中は研究生とお話することも多くあり、また講師担当の大久保氏による普段語られない貴重なお話など、身近な存在の知らない面を知る良い機会となりました。参加者の方にも充実した時間となっていれば良いなと思います。

〔主任 内山 良子〕



東京研究会 絵画部

東京研究会は批評会の他に講演会やクロッキー会も企画しています。今年は楽しく為になるシルバーポイントで描く講習会です。主任が講師になり、事前に作ったシルバーポイントに写生やイメージデッサンなど自由に描きました。手製の燻し箱と温泉源液で燻し、黒くなると歓声が沸き上がりました。匂いで気分は別府温泉か草津温泉に行ったようでした。

〔主任 佐藤 勤〕



中部研究会 絵画部

中部研究会では、定例批評会はもちろんのこと、今年度は実技研修【ガラス絵】、久々にスケッチ会を【動植物園】にて行いました。これからも、色々な企画を実施し、本展に繋がる意欲的な活動を皆さんとコミュニケーションをとりながら出来るようにしていきたいと思います。

【Instagram】 @CHUBU_SHUNKEN

〔主任 長田 文実香〕



中部研究会 版画部

鈴木知子氏と永幡民子氏の提案と指導のもと、通販価格 2590 円から購入できる「パスタマシンでつくるスピード紙版画」のワークショップを開催しました。紙版画の制作過程は今までと同様に、はがき大の原画と用紙をはさみ、くるとハンドルを回し、「完成!」。パスタマシン独特の風合いのある 15 名の作品ができました。ぜひ皆様もお試してください。

〔主任 杉藤 万里子〕



栃木研究会

栃木研究会展は10月11日～14日栃木県総合文化センターで開催されました。70 回記念展として、DM ポスター外看板のリニューアル、研究会会員の 10 号作品の展示をいたしました。会場研究会では小林裕児氏から貴重なお批評とご示唆をいただきました。小品を展示したことで作家それぞれの魅力を伝えることができた展覧会になり、来場者に新鮮な春陽会の印象を感じていただけたようです。

〔主任 高松 博仁〕



絵画本部研究会

前主任の畠山氏から引き継ぎ、研究会本部の仕事をさせていただいております。畠山氏のコメントにありましたように、「これからの研究会、ひいては春陽会自体の在り方が問われる時期」は、まさに今です。各地区の主任の方々のお水面下のご苦勞を感じながらも、今のままでは何かが必要となっている、と感じざるを得ません。主任同士の情報交換をもう少し増やす工夫をして、皆で考えて行きたいと思っています。

〔主任 岸 鹿津代〕

群馬研究会

群馬研究会では、11月16日(日)前橋市において特別研究会を開催いたしました。本部派遣講師は中台ゆう子氏です。健康上の理由で春陽展会場の研究会に出席が難しい方には、大切な勉強の場となっております。写真データ等を活用した密度の濃いたくで優しいご指導をいただき、春陽展へ向けての新たな出発点とすることができました。

〔主任 坂井 和子〕



カット／松宮 直子

中信研究会

今年度、派遣講師等の研究会活動は行いませんでしたが、4名の研究生たちで情報交換しながら各人が研鑽を積んでいるという報告をいただいております。地元の利点は、何かにつけてお互いが身近な存在であるということ。刺激し合う仲間がいるということは大事だと改めて感じました。

〔主任 岸 鹿津代〕

全国研究会からの

声

&

Message

東北信研究会

「沓掛賞の創設」

東北信研究会は 11 月 20 日から 11 月 24 日まで「第 25 回春陽会東北信絵画展」を開催しました。

今回のメインは、春陽会会員で 2003 年にご逝去された沓掛利通先生ご遺族のご好意により「沓掛賞」が創設され、絵画展出品作品の中から研究会会員全員の投票により 2 点選ばれ、その第 1 回の受賞作品が飾られたことです。絵画展作品の充実と来年の本展に向けた制作意欲向上に繋がると期待しております。

〔主任 曲尾 慎一〕



カット／松宮 直子

南信研究会

12 月 7 日（日）、三島耕二先生を講師にお迎えして作品研究会を行いました。参加者 13 名。先生の造形に対するお考えを、作品を通して具体的にお話いただき、これからの制作の糧とすることができました。

翌日は諏訪御柱祭の「木落し坂」を見学後、その映像を大きなスクリーンで体感しました。また、諏訪大社下社の秋宮・春宮を参拝し、万治の石仏（岡本太郎が絶賛）を見て、充実した時を過ごしました。

〔主任 三島かくえ〕



富山研究会

夏季研修では、山村泰雄氏の指導のもと、削り出した立体に箔を貼る実技研修を行いました。また、「2025 春陽会富山研究会展&小品展」（12 月 19 日～ 22 日、富山県民会館美術館）では、派遣講師に畠山昌子氏を迎え、丁寧かつ的確な講評をいただきました。小品も併せてご覧いただき、今後の制作の方向性を考える有意義な機会となりました。

〔主任 桑島美代子〕



春陽会 2025

関西研究会 絵画部

「関西春陽会絵画部展 2025」は9月17日～21日、原田の森ギャラリーで開催されました。20日の研究会では三浦明範先生を講師にお迎えし、制作の指針となる的確な講評を頂きました。なかでも「アートは問題提起するものです」は皆の刺激となっています。他、本展出品作品の下見会、クロッキー会開催と充実した一年でした。

〔主任 金澤 千鶴〕



静岡研究会

静岡では「第27回静岡研究会展」を11/4～11/9、静岡市市民ギャラリーにて開催しました。今回は研究会員以外の方にも参加していただき、いつもとは違った雰囲気の中での開催となりました。

会場批評会には全田紗和子氏を講師に迎え、絵画から版画まで一人ひとりにとってもきめ細やかな指導をしていただきました。また、実際使用されている道具を見せていただく大変貴重な機会でもありました。

一味違った大変有意義な展覧会となりました。

〔主任 藁科 美穂〕



関西研究会 版画部

関西春陽会版画 2025 展では、作品キャプションにスマホで簡単に読み取れるQRコードを導入しました。来場者は作品への「いいね」や感想を送信でき、出品者にとっても直接的な反応を知る貴重な機会となり、新しい交流と共感の形を広げる成果となりました。

〔宮川 良平〕



山梨研究会

山梨市の日下部（くさかべ）公民館を拠点に、定例の作品講評会と実技会、東京からモデルを招いた裸婦デッサン会や写生会で腕を磨き、山梨県立美術館一般展示室において「第42回春陽会山梨研究会展」を開催しました。会期中には本部派遣講師の齊藤澄人氏から、作者に寄り添い熱のこもった作品批評を頂き、一同制作への意気込みを新たにしました次第です。

〔主任 沓間 宏〕



山陰研究会

絵は描きたいが描くものが定まらない。よくあることだが、人生、そんなに決まるものでもない。この部分にどの色を置こうか、好きな色と思うが隣の色、周りの色との調和はどうなる？こうしてあがきながらも次第に自分が見えてくる瞬間がある。絵を並べてそんなことを話せるのはこの仲間あってのこと。小所帯でもキラリと光る山陰研究会です。

〔主任 三島 耕二〕



カット／立堀 秀明

瀬戸内研究会 版画部

昨年以来の研究会を(11月3日松山市 G キャメル K)で行いました。現在所属は岡山2名、愛媛4名です。どちらに集まるにしても、瀬戸内海を挟んで180キロの移動になります。そのためグループラインで情報を共有していますが、やはり不十分です。経費、高齢化など課題もありますが、会って話せる機会を増やしていきたいと思えます。

〔主任 川井 一光〕

九州研究会

第19回研究会展を大分(アートプラザ)熊本(アーツスペース蓮台寺)両会場にて開催しました。年一度の交流と研鑽の場となっており、未完ながら若者なりの力強い作品が並ぶ活気溢れる会場となりました。

講師にお迎えした小林裕児氏の各人への的確な批評に、全員が我が事のように頷きながら聞き入っていたのが印象的でした。続く懇親会が盛り上がったのは言うまでもありません。

〔主任 松本 篤〕



カット／立堀 秀明

瀬戸内研究会 絵画部

瀬戸内研究会は、絵画と版画、それぞれで活動を行う形が続いていますが、昨年「SNAW2024 第2部春陽会全国研究会選抜展」に出品された藤本泰男氏は、相変わらず意欲的に制作を続けておられます。

このように前向きに取り組んでいる研究生に向けて、しっかりと絵画部での「研究会活動」ができる事を目指して行きたいと思えます。

〔主任 岸 鹿津代〕

版画本部研究会

研究会は会の活動を支える重要な基盤です。本部では、各研究会と協力し、より活発な活動となるよう要望を伺い、支援して参りたいと考えております。高齢化による会員減少、会友の離会と先行きに不安が生じる中、北海道、瀬戸内研究会では若手にバトンが渡され、組織の新たな希望となっております。また本年、静岡研究会絵画部より版画部への派遣講師の依頼を頂きました。絵画部とも連携を図って一層の発展に繋がるよう努めて参ります。

〔主任 ウチダ ヨシエ〕

春陽会 100 年史「春陽会史料館」 (WEB アーカイブ)

春陽会史料館は、春陽会が所蔵する創立時からの記録・資料のデータベースです。

出品目録、印刷出版物、新聞雑誌等の掲載記事、音声、写真、動画など、未来に残すべき貴重な資料をデジタル化し、いつでもどこでも検索できるシステムとして構築しています。

日本の美術団体において、先駆的かつ意欲的な取り組みです。



■ 春陽会史料館は、下記 web アドレスよりご覧いただけます。

<http://shunyo-archive.com>



春陽会公式 HP



春陽会史料館

春陽会事務所には、創立当時からの会務に係るスクラップブックと、木村莊八の個人的なスクラップブック計50冊が保存されています。

このたび会員有志による資料撮影により、全ての撮影が終了して興味深い資料をご紹介しますようになりました。

新発見！

木村莊八が1935年(昭和10年)に大佛次郎の短編小説「レスナー館」の挿絵を担った際、大佛が舞台となったレスナー館の外容を木村に説明した手紙の一部です。木村は他にも大佛作品の挿絵を手掛けましたが、二人とも大の猫好きで、「猫友達」でもありました。



大佛次郎直筆原稿



表紙

春陽会アーカイブ係／文

第103回

2026

春陽展

絵画 / 版画

SHUNYO ART EXHIBITION 2026
Paintings & Prints

2026.4.15^③ - 4.27^④

国立新美術館 展示室 2A・2B・2C・2D・3B
〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2

10:00～18:00 4月21日(火) 休館日 最終日は15:00まで(入場は30分前まで)

主催：一般社団法人春陽会 後援：社会福祉法人 NHK 厚生文化事業団

名古屋展——愛知県美術館ギャラリー 5月12日(火)～17日(日)

大阪展——大阪市立美術館天王寺ギャラリー 6月2日(火)～7日(日)

103号(No.107)

春陽帖

表紙／立堀秀明 「青に染む」
15×10cm 木版

カット／松宮 直子 立堀秀明

カットをお寄せいただいた皆様、ありがとうございました。

2026年4月15日発行

編集 桑島 美代子

発行所 一般社団法人 春陽会

印刷・製本 アベイズム株式会社

